

卒業論文の要旨

論文題目	憎き北朝鮮がなぜ“友”“愛する人”という存在に変化したのか —韓国作品の中に見る北朝鮮人—
氏名	内田悠希
メジャー	メディア
(要旨)	
<p>韓国作品における、北朝鮮への眼差しを追う。朝鮮戦争を経て、現在もなお緊張が続く二国間。韓国作品の中に登場する北朝鮮の姿はもっぱら、悪であった。“敵”であったはずの存在が友、同志、そして愛する人として描かれるようになるまでを追う。</p> <p>1999年、2000年の「シュリ」「JSA」といった作品の登場により、映画製作に兆しが見え始める。北朝鮮をしっかりと見つめる作品が登場しだすのだ。</p> <p>論文の冒頭はそれ以前の「反共作品」、厳しい検閲制度を調査した。</p> <p>また私自身が本論文を記すきっかけとなった作品を後半メインで触れる。北朝鮮の軍人と韓国の財閥令嬢が登場する「愛の不時着」。韓国国内だけではなく日本、世界でヒットを果たした当作品を基に論じる。厳しい検閲が行われていたのは1990年代までだ。つい30年前まではまともに映画を作るなどできなかった。そこから30年という月日がたち「愛の不時着」という良作が生まれる。韓国が闘ってきた、自由への歴史とそれを見続け来た観客、視聴者。そして憎き北朝鮮が同じ人間、愛を持った人々だという表現になるまで、それを観客が受け入れるようになるまで韓国映画史、ドラマ史は発展していく。</p>	
(指導教員の推薦のコメント)	
<p>自ら最も好きだという韓国ドラマ、そして韓国映画を出発点にして、なぜ北朝鮮の人々の描き方が変わってきたのかというメディア論に仕立て上げた。論理はやや荒削りで、表現方法や記述形式にも拙いところが目に付くが、広く韓国語も含めた文献や新聞記事、そして数々の作品にあたり、自らの関心領域を一つの論文にまとめた努力を買いたい。</p> <p>この「情熱」は後進の学生にも非常に参考になると思われる。</p> <p>なお、本人は執筆期間のほとんどはソウルに留学中だった。その間、現地の学生などと語り合う中で得た知見などが散りばめられていることも評価したい。</p>	